

朝鮮無教会キリスト教と社会正義 - 金教臣を中心として -

金文吉

1 序論

明治のキリスト教指導者であった内村鑑三は、日露戦争に反対し平和思想を唱えた人物である。彼は、その当時全ての国民が戦争を認める中、「余は非開戦論者であるばかりではない。戦争絶対的廃止論者である。戦争は人を殺すことである。そうして人を殺すことは大罪悪である。そうして大罪悪を犯して、個人も国家も永久に利益を収め得ようはずはない。」⁽¹⁾と戦争に反対し、アジアの平和を強調した。

内村鑑三だけではなく朝鮮においても内村鑑三の無教会精神を受け継いだ金教臣は、戦争に反対し平和を主張した。当時、朝鮮ではロシアの革命や朝鮮の3・1運動によって平和思想が高揚しつつあったが、同時に植民地の朝鮮人のある者たちは日本帝国統治下からの解放のためなら武力によってでも独立を達成すべきだと叫んだ。こうした中で、金教臣は武力によって平和を取り戻す方法よりは、精神的に、即ち信仰をもって平和思想を呼び起こし、朝鮮の独立を獲得すべきだと主張したのである。

当時、金教臣は総督府の政策や既成教会の観点とは異なった方法で布教していたため、遂に彼の朝鮮無教会は異端的教団と烙印を押され、総督府からも不順不応の教団と見なされるようになった。このような反対にもかかわらず、金教臣の無教会は、この世から見捨てられ、その心身に苦しみを負ったハンセン病患者に福音の道を伝えようとする志を一層燃え上がらせたのである。本稿では朝鮮無教会がハンセン病患者に与えた影響の内容を考察することにする。

2 日帝統治期の朝鮮無教会

韓国（以下朝鮮という）に無教会を伝えたのは金貞植である。金貞植は1862年8月6日に黄海道海州で生まれた。彼は1902年独立協会が組織した改革党に加担したという理由で日本警察に連行され、獄中生活を送った。獄中、宣教師によってキリスト教の福音を聞き信者になった。出獄後ケイル（J.S. Gale）宣教師から洗礼を受け、初代朝鮮YMCA幹事を務めながら教会活動をした。1906年、金貞植はYMCAの仕事で東京に行った。そこで、非戦論者として知られている内村鑑三に出会い、無教会信者となった。当時、彼の周囲には朝鮮人留学生も大勢いた。代表的な人物は、柳

(1) 内村鑑三 「戦争廃止論」(1903年)、『内村鑑三全集11』岩波書店、296頁

永模、金教臣、咸錫憲、宋斗用の諸氏である⁽²⁾。金貞植は、彼らが無教会信仰に導いたのである。

朝鮮無教会キリスト教を代表する人物と言えば、第一に金教臣が挙げられる。金は1901年4月18日に咸京南道咸興沙浦里で、金念熙（父）と楊慎（母）の長子として生まれた。1912年12歳の時、韓梅（咸興、州北、清州韓氏の家門で4才年上）と結婚し、長男正孫、次男正民と、鎮教、始恵、正恵、正玉、正福、正愛の6女が生まれた。1916年3月（16才）に咸興公立普通学校を卒業し、1919年3月（19才）に咸興公立農業学校を卒業した。その後、東京正則英語学校に留学した。留学中の1920年4月に、無教会の指導者であった内村鑑三の『求安録』を読み、大きな感動を受け、1921年1月には内村の聖書研究会に参加し無教会信者になった。1927年東京師範学校を卒業し、7年間の日本留学を終えた。帰国後、咸興永生女子高等学校地理教師として勤務した。教師生活をしながら、1927年7月に『聖書朝鮮』創刊号を刊行したが、その8年後に、この『聖書朝鮮』について次のように述べている。

「朝鮮にキリスト教が伝来してから約半世紀に至っているが、いまだに先進欧米宣教師などの遺風を模倣する状態を脱しえぬことを残念に思い、純粹なる朝鮮産キリスト教を解説しようとして、『聖書朝鮮』を発刊したのである。願わくは朝鮮にキリスト教の力ある教訓を伝達し、聖書的な真理の基盤の上に永久不滅なる朝鮮を建立しようと願う。」⁽³⁾

このように、『聖書朝鮮』を発刊した目的は、西欧的なキリスト教を脱却して朝鮮風土に合うキリスト教を伝播するためだったのである。無教会キリスト教とは、金教臣にとってまさにこの朝鮮風土に合うキリスト教だったのであり、彼は、またこれこそが真のキリスト教である点を次のように説明している。

「私は無教会主義をきわめて広義にまた精神的に解する。それは、旧新約聖書を貫通する精神、キリスト、パウロ、ルターの精神、キリスト教の精神、または宇宙にいっぱい満ちている生氣である。私にとって無教会主義とは真正のキリスト教を意味するものであり、無教会主義とは真正のクリスチャンを意味するものである。教会の有無、洗礼の有無、そのようなものは何ら関係がない。無教会主義、すなわち福音、無教会主義者、すなわち信者である。私の無教会主義とはこのようなものであり、この無教会こそ私が内村先生から学んだところの最善、最美、最高のものであり、これこそはキリスト自身の精神であると確信する。…救いがキリストにあることを明白することが無教会主義の使命である。」⁽⁴⁾

(2) 金沢夫「韓国無教会主義の信仰の昨日と今日」第92回無教会研究会レジュメ集 2003年、2頁

(3) 閔庚培「金教臣の無教会主義と“朝鮮的”キリスト教」、『韓国研究』8巻2号 1970年、25頁

(4) 同上 26～27頁

1885年に内村は新島襄宛の手紙において、「小生は単なるクリスチャンの日本人として生き、普通の日本人として死ぬ事を願います。キリストと日本とは小生の合い言葉です。」⁽⁵⁾と述べているが、この内村の立場を端的に示す、“I for Japan; Japan for the World; The World for Christ; And All for God”という言葉に呼応して、金教臣も自らのキリスト教と民族主義との結びつきを、“Bible and Korea, Bible to Korea, Korea on Bible”、すなわち、「聖書と朝鮮、聖書を朝鮮に、聖書の上に朝鮮を」と表明している。

当時、朝鮮民族と教会は日帝統治下において朝鮮総督府と激しい戦いを展開していた。金教臣もまた、総督府が実施する「皇民化」運動の一環であった創氏改名に反対し、また神社参拝拒否運動を行い、労働者強制連行に反対するなど朝鮮民族のために働いた⁽⁶⁾。金教臣の思想は信仰の根本である聖書に基づいて、朝鮮民族を愛し美しい国土を造るという使命感を中心にしていた。彼の平和主義は非暴力民族主義であり、『聖書朝鮮』は朝鮮民族に自由と平和を教えるためであった。3・1運動以降、日帝統治に対して抵抗する朝鮮民族は大勢いたが、金教臣は『聖書朝鮮』を執筆しながら抵抗したのである。『聖書朝鮮』は1942年3月に158号を持って廃刊となった。それは「復活の春」「甲蛙」という文章の内容が問題となり、総督府が廃刊命令を出したためである⁽⁷⁾、「復活の春」と「甲蛙」の内容は、日本天皇制国家は滅亡するという内容であった。

3 朝鮮のハンセン病療養施設

次に朝鮮のハンセン病療養所を概観しよう。朝鮮のハンセン病療養所は、外国のキリスト宣教師によって始められた。1910年(明治43年)3月に釜山でアメリカ人アーピンが数名の患者を収容したのが最初である。ついで翌1911年2月光州でアメリカ人ウィルソンが、また1913年3月大邱でカナダ人フレッチャーがそれぞれ数名の患者を収容して療養所を開いた。いずれも英国ハンセン病救療会という財団から資金援助を受けていた。英国ハンセン病救療会は既に英国国内のハンセン病が絶滅してしまったので、その事業を東洋のハンセン病救療に向けたのであろうか。これらの療養施設は、当初は極めて小規模のものであったが、英国財団の援助の外、1923年からは、総督府の経費補助 - はじめが36,500円であったが、1930年度は73,624円、1936年度には62,596円となった - もあって、漸次設備も増設され、1935年には、次のような規模になっていた。

釜山相愛園	敷地	26,000坪
	建物	823坪
	収容能力	600名
麗水愛養園	敷地	143,750坪
	建物	1,952坪
	収容能力	600名
大邱愛楽園	敷地	45,000坪
	建物	1,048坪
	収容能力	500名

麗水愛養園は光州から移転したものである。これら私立療養所の1940年末の収容人員は、1,523人であった。いずれも無料を原則としたが、財力ある患者からは、衣食住の実費を徴収することもあり、また自給自足の意味で、軽症患者は農園の耕作などに従事させた。

1917年4月に国立のハンセン病療養所が小鹿島慈恵医院として開かれた。国立の病院は、その頃既に各道に18カ所もあったが(1925年4月から小鹿島以外は道立となる)、これらは地方の医療機関の欠乏を補い、また貧民の救療を目的とした普通の病院であった。しかし、19番目の小鹿島慈恵医院は特殊であった。

上述のように、大邱、釜山、光州には私立のハンセン病療養所があって、多くのハンセン患者が集まって来ていたが、当時はまだ小規模で多くの患者を収容するわけにはゆかなかった。収容に漏れた患者は療養所付近に集まって土窟などで生活し、各地に浮浪徘徊して食を乞うので、地域住民は病毒の恐れから不安感を覚え、また悲惨な患者の状態は見るに堪えぬものがあった。そこで、日韓併合の際の臨時賜金3,000万円のうち、救療基金として済生院(孤児盲啞児童の教育などを目的とした国立の社会施設)が保管していた356万余円の一部を用いて、これらの浮浪患者を一定の場所に収容救護する計画がたてられたのである。その療養所の場所として、全羅南道高興郡錦山面小鹿島が選ばれた。この島は高興半島突端の鹿洞港から半キロ位の海上にある、南北3キロ、東西3キロに足らない周囲10余キロの小島であるが、松樹が繁茂し地味も豊かで、しかも外洋とは居金島をもって相隔てられているので、全く静かな内海の風光明媚、気候温暖なところである。その上、敷地に予定された地域の南方に丘陵があって、地形的にも患者を隔離することが容易で、この種の療養施設地としては、まことに好適であった。1916年2月に、敷地195,800坪の買収に着手し、7月、院舎の建築をはじめ、翌年2月その工事を終え、4月から患者を収容開院した。最初の収容患者は100名であったが、その後漸次収容患者を増加し、殊に1927年以後数回設備の拡張が行われ、1929年には収容患者750名となり、敷地も348,983坪に増加した。院長は蟻川亨(在職4年)、花井善吉(在職9年、病没)、谷沢俊一郎(在職4年)、周防正季の諸氏であった。1931年には患者数は3,000人を越えている。

4 皇民化政策とハンセン病患者の処遇

小鹿島でも皇民化政策が行われた。患者たちは毎日6時に起床させられ東方遙拝、皇民臣民誓詞朗読、神社参拝などを強制され、また精神的あるいは肉体的な労働を多く要求された。このような苦しい生活のため、逃走者も多かった。以下、患者たちに課せられた労役の実態をみることにしよう。

(5) 金文吉「内村鑑三の平和思想と朝鮮無教会動向」、『アジア・キリスト教・多元性』第2号、現代キリスト教思想研究会 2004年、129頁

(6) 閔庚培「金教臣の無教会主義と“朝鮮的”キリスト教」、『韓国研究』8巻2号 1970年、41頁

(7) ユボ「金教臣基督教的民族主義考察」、監理教神学大学修士論文 1991年、42-48頁

(1) 土木工事

最初の建物である「職員地帯」の建物は建築業者が立てたが、「患者地帯」では「軽症病舎」「各種附属建物」「公会堂」「刑務所」「運動場」などの敷地工事全体、道路ならびに埋立工事の大部分は患者の手によって行われた。また、患者地帯における煉瓦、木材、栗石、砂利、砂など建築材料の陸揚げや運搬、基礎コンクリート工事などもまた、大部分は患者の労役であり、動員された総延人員は9万8000余人におよんだ。就役した患者に対しては、僅かな作業手当てが支給された⁽⁸⁾。続く、鐘楼(1936年9月)、納骨堂(1937年9月)、灯台(同年10月)、病舎地帯棧橋工事(1939年10月)、皇太后歌碑(同年11月)などの建設も患者の労役で行われた。

(2) 物資の製造

『年報』(1941年)によると、「今次事変(日中全面戦争)ノ進展二伴ヒ各方面ニ深刻ナル影響ヲ及ボシ物資ノ供給愈トナリ当園内需要物資ノ入手ニ就テモ大ナル支障ヲ来スニ至リシヲ以テ患者ノ作業ニ依リ園内ニ於テ生産シ得ル物資ハ自給自足ヲ計リ更ニ進ンデ園外ノ需要ニモ応ズルコトトシ木炭ノ製造、肥料用吹ノ制織、煉瓦ノ製造、粗製松脂ノ採取、兎毛皮、製出等ヲ為シ居レルガ何レモ地方ヨリノ需要旺ニシテ相当多量ノ供給ヲ行ヒツツアリ」(39-40頁)とある。

物資製造について、より詳細に検討してみよう。

1) 製炭事業

小鹿島更生園では、毎年相当多量の木炭を購入していたが、1940年ころになると、木炭の入手が、すこぶる困難となったので、朝鮮癩予防協会の事業として、収容患者の作業による木炭の自給自足を計られた。同時に、園外の需要にも応じるため、全羅南道山林課から派遣された技術員の指導により、炭焼窯6基を築造し、附近の島嶼地代の森林より入手した炭材で1940年11月9日から試験的に製炭を開始した。ところが、その成績がきわめて良く、園外よりの需要も盛んなので、40年度には、更に炭焼窯12基を増築し、将来的には30基まで建設し年産約3万俵の生産を行い、その大部分を地方に供給するという計画が立てられた⁽⁹⁾。

なお、第5代の小鹿島更生園長四亀三圭⁽¹⁰⁾が長島愛生園長光田健輔に送った手紙が『愛生』1944年4月号に掲載されているが、戦争末期の小鹿島の状況を知る貴重な資料である。それによると、「炭製造約2万俵生産予定(地方の需要)、木炭製造は主として自家用、数量未定、松脂採取18年度約200缶」と記述されている。

(8) 『朝鮮癩予防協会事業概要』朝鮮総督府刊行1935年10月、10頁

(9) 『年報』(1940年)、9頁。この年報は医術関係を朝鮮総督府に報告した雑誌である。

(10) 同上。

2) 吠(かます)の製造

収容患者の作業に対しては、それを奨励する意味で、些少ながら作業賃を支給(日額2銭～5銭)し、患者はこれを貯めて小遣に当てていた。しかし、この給与は主として軽症で働くことが可能な患者に偏り、一部不自由者(障害者)に対しては養兔を奨励して、その欠陥を補ってきた。しかし、時局の変化に伴って、吠の需要が激増したのを機に、吠の製織作業を、主として不自由患者に行わせ、作業賃金関係の欠陥を補足するとともに、同時に当局の奨励生産品の充足の一端になるよう計画し、全羅南道当局とも打ち合わせたところ、賛意を得たので、1941年中に差当り肥料用吠20万枚を製造すべく、技術員による在園者の指導を行った。

吠の製織作業には、主として外部作業ができない不自由者および女性患者を従事させた。既に製織機500台の準備がおり、材料である蓬の入手も大体順調に進んだので、1941年2月より本格的製造に着手した⁽¹¹⁾。

3) 松脂の採取

松脂は軍需などその用途が多く、殊に日中戦争以来その需要は特に著しいものがあった。そこで松脂の採取に関しては、国策的に激励された。小鹿島更生園の病舎地帯には採取に適した樹が茂る広範囲の山林があり、1939年以来、松脂の採取を行ってきた。年間約6,000キログラムの粗製松脂を生産し、全羅南道山林会を経て供給した⁽¹²⁾。

4) 兎毛皮の生産

小鹿島更生園の収容患者が食用並びに日常慰安のため飼育していた家兎は数千頭を数えたが、この兎の屠殺に際し、毛皮は全く顧みられることがなかった。しかし、日中戦争以来、兎毛皮は軍需品として、相当重要な地位を占め、多量の需要があるに鑑み、屠殺のたびに剥皮させて、規格に適合する製法により消毒保存し、年間約1,500枚を供出するようになった。『愛生』(1944年4月号)に掲載の四亀園長の「小鹿島更生園近況」によると、養兎は「飼育数千頭以上なるも内三千頭分毛皮は軍需に供出、肉は患者食用」と記されている⁽¹³⁾。

5) 煉瓦の製造

1933年以来、6年にわたる小鹿島更生園の拡張工事に際し、建物はすべて煉瓦造としたため、莫大な煉瓦が必要になった。しかし、近隣にその産地がなく、これを遠隔地から買い求めるとなると、多数の日時と多額の輸送費を要し、一方建築工事は、急増する患者の収容上緊急に必要となっていた。そこで、園内に工場を設置し煉瓦の自給自足を計ることとしたが、土質調査の結果、豊富な原料土があることが分かった。そこで、技術者を招き焼窯を建設し、1933年12月より煉瓦の製造を開始した。

(11) 滝尾前揚書、26頁

(12) 同上

(13) 同上

これが、園内における煉瓦の製造の始まりである。1939年末に至る6か年間に建設された患者6000名を収容する病舎を始め、事務、治療両本館、各種の倉庫、職員300名の官舎など、すべての建築物は、全部園内で生産した煉瓦を使用した。煉瓦製造には軽症患者をあてた。拡張工事後半以降は、技術職員の監督下にほとんどの患者が煉瓦製造に従事した。以上のように、島内のほとんど全地域にわたる莫大な建物は、患者が製造した煉瓦で作られたのである。この園内で生産の煉瓦は南部朝鮮地方各地から頻繁な需要があり、殊に大陸侵略戦争の影響による物資欠乏の深刻化にともない、需要が殊に激増したため、1940年現在の年産140万個の製造能力をもってしても、到底供給が困難な状態にあったと、『年報』(1940年)は報告している。

朝鮮総督府鉄道局内、東亜旅行社朝鮮支部発行『文化朝鮮』第4巻第3号(1942年5月)は、「小鹿島更生園」を特集している。その掲載記事に相馬美知の「小鹿島更生園訪問記」があり、その中で保導課長高橋留之進や庶務課長横田用基が、小鹿島更生園の収容患者の労働について次のように語っている。

「『この棧橋も患者の手で造ったのです。請負に頼めば15万円かかるというのですが、それを僅か4ヶ月で竣工したのです。』と言いながら、横田さんは自動車に停車を命じた。……昨日から高興郡の豆源面に6千呎の物を受取りに出かけていますが、意気揚々と上がってこられた。……船の叫が、一人一人の背に背負われて運び上げられ、精米所に運搬された。何百人という癩者勤労者の列、それはちっとも癩などと考えられない壮者の列である。それがずっと海岸に続く。凄まじい壮観である。誰一人ぐずぐずしていない。きびきびした活動である。高橋さんはその勤労者の列の前で語るのであった。『患者の治療にとって精神の転換ということが重要です。労働による救い、そこにこの更生園の特色があります。病気ということのを忘れさせることです。今年の呎10万枚、木炭3万俵、煉瓦170万枚、松脂6,000キログラム、兎毛皮製造は重病者の仕事になっていますが、癩は動物には伝染しません。またすべては立派に消毒して出します。随分な労働実績ですが、それを狙ってやっています。その労働力は陸の人夫の3倍半あります。それは約30貫(約130キログラム)ですが、それを一人で担ぐ。そうして30町運んで、船に乗せる。これは全く精神力です。感謝観念の力なのです。』」

以上の話を通じて小鹿島へ収容されたハンセン病患者の過酷な労働の一端がわかる。

5 小鹿島ハンセン病患者への「断種」の実施

小鹿島ハンセン病患者の中に夫婦同伴する人々がふえてきたため、子供を生まないように「断種」手術が行われた。この「断種」についてはほとんどの患者が反対した。

「そのころ近くの串良町から入園している男が、時々無断帰省して妻子のもとへ帰るから、という理由で手術室に連れ込まれ、あわや『断種』手術を施されそうになって、驚いて逃げ出

すという事件があった。郷里に妻子のある者までワゼクトミーさせようという施設のやり方に、独身者の男たちまでが反発し、園内すべてを巻き込んだ騒ぎとなった。しかし、この騒ぎにはリーダーがいるわけではなかった。その中で九州治療所時代に両足を切断され、それだけ治療所の内情にも通じていた安村（安村利助、当時54才）が、いつの間にか中心的存在となっていた。安村は『断種』について、患者の無知につけこむような施設側のやり方を非難し、『断種』手術はあくまでも本人の承諾によって実施することになっているのではないかと園当局に明確な回答を求めた。』⁽¹⁴⁾

6 金教臣と小鹿島のハンセン病患者たち

上述したように、初期の朝鮮のハンセン病医療機関は宣教師の手によって設置され、最初の医療事業は釜山から始まった。どの国でも、宣教師たちが福音を伝えるとき、先ず医療事業を通じて伝道を始めるのが一般的であるが、その点は朝鮮でも同じであった。

釜山の医療機関が最初に設けられた場所は勘蛮里であった。勘蛮里の位置は、現在の釜山外国語大学である。その後、1934年に竜胡洞に移り、今は竜胡洞からまた長安新都市に移されている。金教臣の『聖書朝鮮』が初めて伝えられたのはこの釜山勘蛮里ハンセン病収容所であった。次の引用は当時の様子をよく伝えている。

「その後も逆境のなか、さまざまな波乱が積み重なって起りました。しかし、その最中でも一人、二人と、徐々に伝道の道は開かれ男女合わせて20人余りにまで至りました。時は流れ信仰の友たちは四方八方に散り去って行きました。ある人は故郷へ、またある人は日本へと去っていき勘蛮里教会には凡そ10人余りが残留していました。そして小生とともに出所することになった信仰同志5人は1934年9月に自ら退院して京城へ上京し、2ヶ月程度の苦労を経た後、10月の下旬、ハンセン病患者募集により全南小鹿島に来ることになりました。我ら5人の一行は京城にいるとき、金先生をお訪ねして、一度お目にかかりたいという思いましたが、ハンセン病患者の身で先生にお会いすることは難儀なことゆえ、哀惜の心と疲れはてた我が身の悲哀を胸に収め、止めどもなく流れる熱い涙を溢れさせたままその場を後にしたのです。そして、この小鹿島に来て入院した後、教会の内幕を探ってみたところ、思った通り、痛恨の涙を流さずにはおられないような現状でした。』⁽¹⁵⁾

小鹿島の収容所は1934年、全国に流浪するハンセン病患者を集めて設立されたが、前述の釜山竜胡洞はもちろん、各所の収容所はそのまま運営された。『聖書朝鮮』はこうした全国のハンセン病患者たちに生命の言葉として普及していったのである。小鹿島のハンセン病収容所にも多くの読者がいたが、小鹿島の当局は皇民化政策の妨げになるということで『聖書朝鮮』の購読は良くないことと見做し、1940年に入ってから『聖書朝鮮』の購読を禁じ始めた。また、ハンセン病

(14) 星塚敬愛園入園者自治会編 『名もなき星たちよ』星塚敬愛園社 1985年、38-39頁

(15) 金教臣『金教臣全集』第1巻 金教臣全集刊行会1955年、131頁

患者の中にも『聖書朝鮮』の購読に反対する人がいた。すなわち、

「よって、その後 1933 年に聖朝誌（『聖書朝鮮』）を購読したい気持ちはやまやまでしたが、無知な反対者たちの圧迫のため読めずにいたところ、ようやく信仰同志の中の一人が院外の他人の名義で聖朝誌を購読することができました。我らの同志たちは病院の区域内では聖朝誌を読めず、反対者たちの監視が緩んだときを利用して病院の裏山の松林に隠れて密かに集まりましたが、読むたび朽ちることのない真実の復興が起りました。しかし、それも束の間、反対者たちの監視により発覚し、無条件異端派に属している者どもと見做され無数の迫害を受ける身になりました。その後は青色の本さえ見えたら必ず調査が行われるので一時期は読めず、隠しておいたこともあります。ああ、どうしようもないハンセン病によって、また衣食住のため彼らの支配を受けざるを得なかった私どもの重苦しい心境はいかなるものであったでしょう。」⁽¹⁶⁾

周知のごとく、当時の既成教会は金教臣の無教会を異端派と見做していたのである。朝鮮無教会の伝来当初から、既成教会が異端と決めつけた理由は、先ず、教会がない教団という点が挙げられる。無教会での布教方法は既成教会のやり方とは異なっていたのである。既成教会（多数の教団）の場合は十分の一の税を捧げ、未明の祈祷会や毎週行われる聖書の勉強会にも参加しなければならないのに比べ、金教臣の無教会は内村鑑三の場合と同じく教会がなく、布教方法も違っていた。しかしそれは、朝鮮にキリスト教を伝えた初期の宣教師たちの教えに既成教会が全的に順応していたことにもその原因がある。つまり、宣教師たちは自分たちが宣教する以外の教団は異端と見做していたからである。これに対して金教臣は、日本帝国の統治下において奴隷になった朝鮮人と荒廃した朝鮮の大地とが救われる道は、イエス・キリストの真理以外にないと自覚し、何よりも『聖書朝鮮』の執筆に力を注いでいたのである。

1935年3月16日、金教臣は小鹿島のハンセン病患者から送られてきた手紙に始めて接し衝撃を受けた。彼の日記にはおおよそ次のような内容のことが記されている。ハンセン病患者との出会いは彼の一生で最も大きな出来事の一つであり、このことを知友たちに即刻伝えなければならない、韓国の有能な青年たちに対する伝道事業は他の宣教師たちに譲り、我々は今後小鹿島に収容されている5,000人のハンセン病患者の兄弟姉妹たちに福音を伝え、コイノニアを結ぶことに全力を尽くすべきである、と。その後金教臣は小鹿島に対する関心と愛を注ぎ続け、小鹿島から来た手紙を『聖書朝鮮』に要約して公開した。この手紙は信仰によって逆境を克服した一つの希有な信仰文集となっている。

金教臣はハンセン病患者の手紙の中に叙述されてある躍動する生命の力に大いなる衝撃を受け、使徒パウロやヨハネの手紙のような感動を味わい、キリスト教が何であるかを未だ知らぬ人はこ

(16) 同上

の手紙を読めば理解できるであろうと語っている。キリスト教は元々靈的な力ある宗教と言われ、口で靈力を叫ぶ者や文章で靈的な力を説明する者は多いが、実際に靈的な力ある信仰によって生きるハンセン病患者たちの中に、金教臣は靈魂の勇姿を発見したのだ⁽¹⁷⁾。

金教臣の無教會的信仰の最も注目すべき特徴は、この地上で人々から卑しい人間として取り扱われるハンセン病患者のために、総督府の監視の目が光っているにも関わらず、努力したことにある。当時、小鹿島のハンセン病患者たちは金教臣が執筆した『聖書朝鮮』を「聖朝誌」と呼んでいた。というのも、『聖書朝鮮』は朝鮮で最も聖なる言葉が収録されていると思われていたからである。たとえば、文信煥は、「聖朝誌」を感銘深く読み、聖書と同じように取り扱い、昼夜を問わず持ち歩いていた。彼は金教臣に次のような手紙を送っている。

「ああ！ 先生が送ってくださった聖朝誌と愛のメッセージは世人からは得ることのできぬ、キリストの尊い血と尊い肉に浸された真の愛の言葉であります。先生が送ってくださった聖朝誌を無力な私は手にして黙々と見ながら抑えきれない涙を流す、小生の心霊には愛慕する聖朝誌を耽読する前から口では申しきれないほどの喜びに溢れ、その上、靈的にも満ち溢れる次第でございます。ああ！ 私の生涯の望みは、我が主の熱烈な心から発生される聖書朝鮮を通じて、我が父の永遠な胸元に抱かれ永遠に向かうこと、また、復活であり、真理であり、生命であるイエス・キリストの形姿に似ていくこと、全ての全てが成就されることを信じ、無限の歡喜に満ち溢れていることです。」⁽¹⁸⁾

『聖書朝鮮』を通じて、金教臣が小鹿島のハンセン病患者たちに及ぼした影響には内面と外面の二つの面があったように思われる。まず、内面的な影響であるが、それは患者たちが無教會の社会正義と真の神を知り、苦難に耐える信仰を得たということである。その点について、無教會信者が金教臣に宛てた手紙を引用してみよう。

「12月18日(日)快晴、感慨無量で恵書を奉読させて頂きました。手紙一枚がそれほど貴いとは思っていませんでしたが、先生の恵書は私にとってあまりにも貴いものでした。ハンセン病は主が私に下さった頸木であり、試練の鞭です。私は、このハンセン病を通じて2,000年前ゴルゴタで釘を打たれた主イエス・キリストに巡り会いその真理を知り、救いの福音の中で生まれ変わることができたのですから、私はハンセン病患者であった事実を決して嘆いたりはしません。ハンセン病でなかったら、私は新たに生まれ変わる恩恵に恵まれることはなかったでしょう。また私がイエス・キリストを信じていたとしてもハンセン病患者でなかったとしたら、多くの先生たちが信じていらっしゃる真の生きた信仰の別天地を得ることは不可能であったことでしょう。ですから、ハンセン病患者であることを至上の喜びと悟り、感謝せざるを得ません。今度の手紙では信仰的に色々のご念慮していただき真に有難く存じており

(17) 金丁煥 『金教臣 - その生活の信仰と所望 - 』、韓國神學研究所 1994年、123頁

(18) 金丁煥 『金教臣とムントウンア』金教臣記念会刊 1998年、30頁

ます。主イエス・キリストの驚くべき恩寵があることを求めます。同封して送ってくださった切手有難うございます。故郷の母に手紙を出すときに限って使わせていただこうと思っております。切手の出処を母に知らせます。母も主イエス・キリストを迎えられるよう切に求める心情であります。最後に貴宅に聖恩が常に満ち溢れることをお祈りいたします。小鹿島中央里 信者拝上」

この手紙から、ハンセン病という悲惨な現実にもかかわらず、金教臣を知り無教会の信者になったことを内面において誇る心を読み取ることができる。この内面的な影響から生じた信仰スタイルは、次にみるもう一つのスタイルと対比して、穏健派と呼ぶことにしたい。

しかし、以上の信仰スタイルに対して、外面的な - 外面に行動として示されることになる - 影響としては、金教臣の『聖書朝鮮』を読み深い信仰もあつたけれども日帝統治に不満を持ち民族精神を発揮するため周防正季園長を殺害した李春相の例を挙げることができるであろう。光復⁽¹⁹⁾半世紀、分断半世紀、時は過ぎたものの、歴史の中に未だ秘められている事件はあまりにも多く、また明らかにすべき事実は山のように存在しているが、李春相も、そうした人物の一人である。

彼は1942年6月20日午前7時30分に小鹿島更生園園長周防正季の胸を包丁で突き刺して殺した。刺殺の概要は次のように記されている。

「20日午前8時から園長銅像前の広場で、報恩感謝日の行事を行うため3,000人余りの収容者が集合させられていた。園長が乗用車から降りようとしたとき、突然一人の収容者が韓国語で『貴様は我が民族をあまりにも容赦なく働かせた』と大声で叫んで、包丁で園長の胸元を突き刺し、殺したのである。」(第一・二審判決文)

総督府石田厚生局長は、この事件を6月23日殺害事件として発表し、「小鹿島更生園恩人周防博士殉職。日本で最も有名な福祉功労者が朝鮮人凶悪犯に殺害された」(『総督府官報』)と哀悼した。それだけではなく、総督府御用新聞である『毎日新報』も日本の偉大なる星が地に落ちたと報道した。また、当時日本国内の有名新聞であった『東京日報』『大阪朝日』『中国新聞』『広島新聞』等の10大新聞社が一斉に大書特筆しては「犯人は更生園の園生で凶悪犯、前科者李春相であり、犯人は国内で重ね重ね暴行を働き、今度は園長を兇器で殺害した」と報道した。朝鮮国内に比べて日本国内のマスコミがより大きくこの事件を取り扱ったことは、当時の日本国内の新聞から確認できる。

では、周防園長はどのような人物なのか。彼は小鹿島更生園の園長として赴任したが、元来の天皇家の血筋の家門の生まれで、多くの高官職を歴任し、更生園に赴任したのである。彼は朝鮮内のハンセン病(癩病)が増加していくことは兵站基地化を目指す朝鮮での最も大きな障害物であり、天皇制国家の皇民化政策にとって最大の問題と考えていたのだ。それゆえ、日本のマスコミが報道したように、彼は有名な朝鮮統治の指導者として赴任したと考えることができよう。

(19) 韓国で、日本の植民地支配からの解放を意味する。

また、日本の有力雑誌『楓の陰』 - 楓とは、明治天皇昭憲皇后美子（明治天皇の妃）の宮中の印章 - 1942年7月号（第135号）に、「此度の周防博士の遭難は不良患者の偏見により、朝鮮にあっても療養所内でも救世主と称されていた恩人を殺してしまった。」と記されており、日本ハンセン病療養雑誌である『愛生』第12巻8号（1942年8月1日）の記事の内容を見ると、朝鮮の第1凶悪犯は伊藤博文を殺害した安重根であり、第2凶悪犯は李春相であると紹介している。つまり、安重根の事件と同等の重大事件として扱われているのである。周防は、このような重要人物であったゆえ、総督府の圧力により朝鮮国内でのマスコミでは縮小して扱われ、日本では大きく扱われたのである。朝鮮総督府の官報を見ると周防園長は、その後の「正四品・勳三等」に叙されているが、李春相は光州刑務所に送致された。こうして、この事件の真相は、今日に至るまで闇に葬られることになった。

先の小鹿島のハンセン病収容所の強制労働の実態から明らかのように、日本帝国主義が小鹿島にハンセン病患者の収容所を設けた理由は、ハンセン病患者を収容するためだけではなく、実際、小鹿島ではハンセン病患者だけが収容されていたのではない。収容されていたある人物は、「朝鮮八道のハンセン病患者だけが捕らわれてきたのではなく、日本帝国主義にとって妨害人物と思われる者の全てが不良者扱いされ捕まってきたのである。彼らは海に投げられ殺されると思っていたが、気が付いたら小鹿島更生園だった」と証言している。「当時、あまりにもきつい労務のあげく死んだ人が多かった。早朝に起床し煉瓦を焼いたり、炭を作ったり、土木事業（堤防事業）の動員、それに一日3回の神社の参拝、園長の銅像に参拝するなど、日本に連れていかれた強制徴用より酷かった。」（現在生存の人物の証言）

小鹿島での生活はあまりにも酷かったため、逃走する人が多かった。小鹿島更生園『年報』（1942年4月25日刊）を見ると1941年の場合、男子290人、女子20人、計310人ももの逃走の事実が報告されている。

年度	1933	1934	1935	1936	1937	1938	1939	1940	1941	合計
男	1	9	65	54	24	24	13	31	76	290
女	0	0	2	6	0	1	0	1	10	20
合計	1	9	67	60	24	25	13	32	86	310

（金文吉『ハンセン病患者権益保護のための政策セミナー』
（財）ハンセン病協同会 2002、23頁）

現在碑文は残っていないが、生存している園長の銅像を作り、園生らを参拝させたということは、小鹿島更生園の園長はいわば神格化されていたと言える。碑文には、「この地は国を清潔になされ、献身なされた我々の父であられる園長閣下の恩恵の小山である。我々を救い、心を癒してくださいませる更生園。感謝の涙を流す我々。永遠に忘れられぬ閣下の業績と意に従い造られた小山、誠を尽くし、恩恵の報恩を祝う今日の良い日」と記されている。更生園には、この他にも、天照

大神を祭る神社、天皇に仕える忠魂社などがあり、多くの園生らの思想教育に用いられた。日本帝国主義の皇民化の殿堂が小鹿島更生園であったと言えるかも知れない。(現在も当時の神社は残っている)

酷い労務が多くの患者たちに強制されていたことは事実であり、李春相はそれに我慢しきれず園長を殺害したのである。彼は光州刑務所(光州地方裁判所刑事部)で死刑判決を1942年8月20日に下され、その年の10月2日、大邱裁判所判事部で死刑判決(第二審)後、高等裁判所で上告棄却(同年12月7日)され、1943年2月19日に、大邱刑務所で死刑が執行された。27才の若さであった。第一審光州地方裁判所の「判決文」と第二審大邱裁判所の「判決文」はほとんど同一の内容である。園長を殺害した李春相は、無教会信者であったけれども社会正義のために果敢に行動した人物であり、先小鹿島の無教会信者の穏健な信仰に対して、急進的な信仰スタイルであったと言えよう。

当時小鹿島で李春相と一緒にいた人物(25才で入園、現在86才)は次のように語っている。

「25才で村に来た。断種手術しなければいけない、そうすれば結婚させてやると言われた。夫婦一緒に住める家も建ててやると。井戸を掘って、家を建てて、冬至に……。院長(周防正李第四代院長)の銅像を建てなきゃならないんだが……。院長の銅像を建てるために、金を差し出さなければいけないし、とにかく私たちは何もかも差出さなければいけないと。……。働いて、一日3銭。よけいに働く人は5銭、と言われたけれど全くくれなかった。……。銅像を建てた(1940年8月)後は、夜明けの3時に銅像を拝めといわれた。……。院長先生ありがとうございますと拝みにいかなければならなかった。……。銅像参拝……。神社参拝……。それをしなければ売国奴だ、反抗者だと言われた。この野郎、何故しないんだと言われたが、私はキリスト教徒だからそんなことは出来ないと答えて監禁室に入れられて死んだ人々がたくさんいました。」⁽²⁰⁾

こうした背景を考えれば、李春相の事件は、小鹿島ハンセン病患者たちに課せられた苦役にととう堪忍袋の緒が切れて李が犯した殺人事件であったことがわかる。この李の例は、金教臣の影響を受けた人々の中に急進派として行動した信仰者がいたことを示している。他方、先に述べたように金教臣の『聖書朝鮮』を通じてキリスト教の信仰を得た患者たちの多くの者たちは、その信仰があったゆえ、院での過酷な生活に忍耐力を持って生きることができたのである。現存している患者たちの証言によれば、『聖書朝鮮』を通じて無教会信仰を得なかった者の中には、逃亡するか、収容所生活に適應できず自殺に至る者がいたが、金教臣の『聖書朝鮮』の影響で無教会信者は忍耐強く苦役にも辛抱したのである。金教臣と信者とのやりとりは155回におよび、これについて金教臣自身、当時無教会は小鹿島に花開いたと語っている⁽²¹⁾。しかし、『聖書朝鮮』を通じて融合事業と皇民化政策に同調した人々(穏健派)が出たことは、総督府からみれば、むしろ

(20) 滝尾前喝書、293頁

好都合だったと言うべきかもしれない。

7 結論

内村鑑三の “ I for Japan; Japan for the World; the World for Christ; And All for God ” という言葉に呼応して、金教臣が、“ Bible and Korea, Bible to Korea, Korea on Bible ” というスローガン（「聖書そして朝鮮、聖書を朝鮮に、聖書の上に朝鮮を」）を掲げたことは、すでに論じた通りである。実に、このスローガンにあるように、金教臣は、聖書に基づいて朝鮮のため、そしてハンセン病患者のために働いたのである。こうした金教臣の影響は、内面的な信仰の力によって苦難に耐える信仰者と、積極的で急進的な行動に立った信仰者との、二つの信仰スタイルを生み出すことになった。現在の韓国においては、急進的であった李春相の信仰が非常に高く評価されている。追慕会が組織され、解放運動家として認めるように政府に対する署名運動が行われている。こうした点からみれば、金教臣の無教会キリスト教の社会正義の精神は、とくに急進派の人々においてははっきりと示されていると言えるであろう。

参考文献

- 1 . 滝尾英二『近代日本のハンセン病と子供たち』広島青丘文庫 2003年
- 2 . 滝尾英二『朝鮮ハンセン病史日本植民地の小鹿島』未来社 2001年
- 3 . (財)友邦協会『朝鮮の救癩事業と小鹿島更生園』友邦協会 昭和42年 11月15日
- 4 . 『韓国癩病史』大韓癩管理協会 1988年
- 5 . 『年報』1巻-10巻 国立小鹿島病院 1915-1998年
- 6 . 滝尾英二『植民地下朝鮮におけるハンセン病資料集成』1巻-6巻 不二出版 2002年
- 7 . 金文吉「ハンセン病患者権益における李春相について」、『ハンセン病患者権益保護のための政策セミナー』ハンセン病協同会 2002年

(きむ・むんぎる 釜山外国語大学大学院日本語日本文学科教授)

(21) 金丁煥『金教臣とムントウンア』金教臣記念会刊 1998年、30頁